



女子チーム創設ガイド
未来の創造 × 女子サッカー

PRESENTED BY 日本女子サッカーリーグ

なでしこ LEAGUE™



世界一のリーグを目指して

女子サッカーと共に、新たな 未来を創造しませんか



1989年、日本女子サッカーリーグは開幕しました。以降、国内における最高峰のリーグとして、日本の女子サッカーをけん引しています。

女子サッカーの認知度が高まるにつれ、リーグの参加チーム数は年々増加しています。さらに2011年、なでしこジャパン（日本女子代表）がFIFA女子ワールドカップ ドイツ2011で初優勝を遂げたことを機に、リーグはかつてない盛り上がりを見せています。しかし、世界一にたどり着くまでの道のりは順風満帆ではありませんでした。過去には不景気のあおりを受け、廃部に追い込まれた企業チームがありました。サッカーを辞めざるを得ない選手もいました。

それでも、サッカーに夢を追い続けた選手たち、そして、選手たちをサポートする自治体や支援企業、ファン・サポーターの存在があったからこそ、今の日本女子サッカーがあるのです。

日本女子サッカーリーグはこれからも、サッカーに情熱を燃やす選手たちと共に、世界一のリーグを目指して歩み続けます。

女子チーム創設ガイド『未来の創造×女子サッカー』では、日本女子サッカーリーグ加盟および加盟希望チームの中から8クラブをピックアップし、クラブ創設の経緯や運営体制などを紹介しています。

アマチュアがほとんどの女子サッカーの場合、運営体制や生活面・プレー面における選手のサポート体制、地域・企業との関わり方などは、それぞれ異なるため、目的や環境、財政規模に応じてクラブを創設できることが、女子サッカーの大きな利点とも言えます。

仕事や学業に励みながら、サッカーとの両立を図っている選手たちの存在は、地域や企業に良い刺激を与え、さまざまな相互メリットを生み出しています。

女子サッカーには、多くの可能性が秘められています。

可能性の扉を開いてみませんか。そこにはきっと新しい未来が待っているはずです。

伝統と実績を誇る名門クラブ 代表選手を輩出し続ける育成環境



日テレ・ベレーザ



運営会社

東京ヴェルディ1969フットボールクラブ株式会社

所在地

東京都稲城市矢野口4015-1

クラブ理念

- 常に「感謝」の心を表現する「誰にでも開かれた」クラブ
- 「感動」「夢」「希望」に溢れたサッカーを展開するクラブ
- 「選手育成」を通して日本サッカーの発展に貢献するクラブ
- 「ホームタウン」の発展に貢献するクラブ
- 「クラブに関わるすべての人々が豊かになる」クラブ

クラブ沿革

- 1981年 読売サッカーカラーブ女子「ベレーザ」創部
(ベレーザはポルトガル語で「美人」の意味)
- 1989年 日本女子サッカーリーグ加盟
- 1994年 西友とスポンサー契約を結び「読売西友ベレーザ」に名称変更
- 1998年 スポンサー契約解消により「読売ベレーザ」に名称変更
- 1999年 日本テレビ完全出資となり「NTVベレーザ」に変更
- 2000年 「日テレ・ベレーザ」に名称変更

アカデミー(育成組織)

日テレ・メニーナ(中高生女子)

日テレ・メニーナ・セリアス(中学生女子)

「名門」たるゆえん 日本女子サッカーを代表する選手の輩出

1981年、読売サッカーカラーブ(当時／現・東京ヴェルディ(J2))の女子チームとして創部した日テレ・ベレーザ(以下、日テレ)は、後に紹介する伊賀フットボールクラブくノ一とともに、日本女子サッカーリーグに第1回大会から参加しているクラブです。そして、リーグが2部構成になったシーズンも一度も降格を喫することなく、トップリーグの第一線で戦い続けてきました唯一のクラブです。

優勝回数はリーグ12回、全日本女子サッカー選手権大会10回などどちらも最多記録。また、育成組織の日テレ・メニーナ(以下、メニーナ)も全日本女子ユースサッカー選手権大会で最多6回の優勝を誇っています。

例えば、2011年FIFA女子ワールドカップで優勝したなでしこジャパンのメンバーのうち、日テレに所属歴のある選手は21人中9人でした。現在は所属チームの異なる澤穂希選手や宮間あや選手、大儀見優季選手らも過去には日テレで研さんを積み、巣立っていった選手たちです。U-20/U-17日本女子代表も含め、各年代の日本女子代表チームに多

くの選手を輩出しています。

また、2014年FIFA U-17女子ワールドカップ(コスタリカ)でチームを初優勝に導いた高倉麻子監督、AC長野パルセイロ・レディースで指揮を執っている本田美登里監督ら、日本を代表する女性指導者も輩出しています。



トップチームへの狭き門～中学生からの一貫指導

日テレが代表選手を多く輩出している背景には、クラブの特徴でもある中学生からの徹底した一貫指導体制があります。

トップチームであるベレーザの育成組織として1989年にメニーナ、2012年にはメニーナ・セリアス(※)が創設されました。それぞれ個の育成を目的に、トレーニングでは基本技術・個人戦術を徹底させ、アシリ

ティー(敏しよう性)を養うトレーニングなどを通して、育成年代に身につけるべき基本的な要素を獲得させるなど、サッカー選手としての強固な土台をつくり上げています。また、メニーナの中でもレベルが高い高校生は、メニーナ登録のままベレーザでプレーさせるなど早期から個の強化を図っています。

「小学6年生を対象にセレクションをしますが、合格者は一学年で5~6人ほど。その中から1人はベレーザにつながればいいという考え方です。メニーナでは高校に上がる前に一度選手の見極めをします。そこで人数が半分に絞られることがあるので、高校生の人数は少ないんです」と話すのは、日テレの元選手であり、メニーナで長く指導してきた実績を持つベレーザの寺谷真弓監督です。トップチームへの道は狭き門なだけに、現在は全国から選手を募ることはしていません。基本的には、ベレーザに通える範囲の選手を対象としています。

また、ベレーザの監督を含めコーチ陣はカテゴリーに関係なく各年代の選手を把握しており、下の年代からスムーズにトップチームへ押し上げられる指導体制がとられています。「指導者が全体像を共有できていることは強み。新しい選手が下から上がってきたときも指導方針は変わらないので、うまくチームになじむことができています」と寺谷監督。外部から加入した選手の場合は、よほど能力の高い選手でないとベレーザのレベルに慣れるのに苦戦するほどです。

※メニーナ・セリアスは、女子中学生年代の活性化を目的とした、いわば普及に近い組織です。東京都サッカー協会に加盟登録して活動しており、創部1年目で挑んだ東京都女子サッカー中学リーグ4部では、7戦全勝(78得点無失点)で優勝を飾りました。

不況の時代を乗り越える

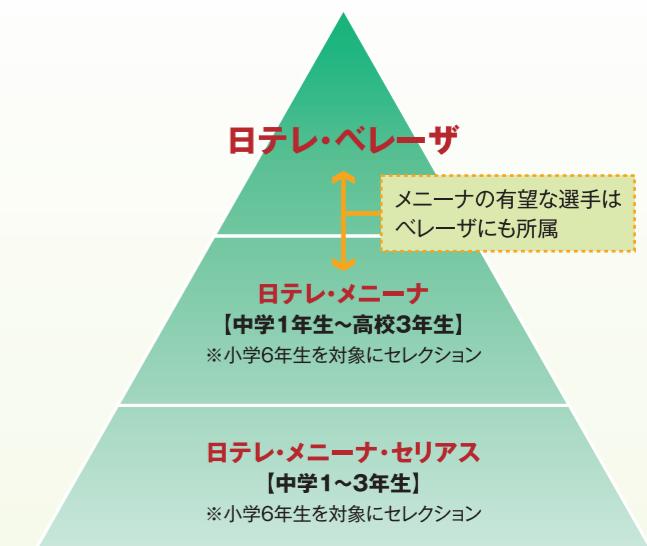
1990年後半、日本女子サッカー界に激震が走ります。経済不況の影響もあり、企業チームは次々と廃部に追い込まれ、1998シーズン終了後には4チームが日本女子サッカーリーグから退会。さらに2000年シドニーオリンピック出場を逃したことでの日本女子サッカーは低迷の時代を迎えることになります。

日テレも不景気のあおりを受けましたが、他チームほどの打撃は受けませんでした。その理由のひとつは、1990年代中頃の好景気時に、他チームがプロ選手を雇用したり、支援企業の多大な恩恵を受けて事業を

日本テレビとのネーミングライツパートナー契約

日テレが大きな転機を迎えたのは2009年です。1999年から100%の出資を行っていた日本テレビ放送網株式会社(以下、日本テレビ)がクラブの経営から撤退。運営会社も株式会社日本テレビフットボールクラブから、現在の東京ヴェルディ1969フットボールクラブ株式会社へと改められました。

日本テレビという大きな後ろ盾を失った日テレでしたが、日本テレビは完全に撤退するわけではなく、『ネーミングライツパートナー契約』を新たに締結します。鈴木和宏・クラブマネジメント部長兼育成・普及事業部長は、「それまでは同じグループの中の男子の部、女子の部という感じでし



JOCジュニアオリンピックカップ
第17回全日本女子ユースサッカーリーグ選手権大会史上初の4連覇を達成した日テレ・メニーナ
(2014年1月)

拡大していく中でも、育成に重きを置いたスタンスを崩さなかったからです。一時、プロ契約の選手もいましたが、男子のプロ選手が現役引退後に苦労していることを目の当たりにしていたため、プロ化に手を広げることはありませんでした。プロ契約が厳しくなり退団する選手がいても、メニーナから積み上げてきた若い選手たちの台頭により、チームはそれほどのダメージを受けずに活動を続けることができたのです。これを機に、日テレはより完全な育成システムを確立させていきました。

たが、これほど『日テレ・ベレーザ』という名前が確立したのはネーミングライツがついてからだと思います。女子サッカーチームにネーミングライツをしていただいているのはうちくらい。日本テレビさんにはとても感謝していますし、クラブにとっては一番のパートナーです」と話します。形は変わりましたが、女子サッカーへの理解を示し、チームを変わらずに支援している日本テレビの存在は大きな支えとなっています。また、日本テレビにとっても、多くの代表選手を擁する知名度の高い日テレ・ベレーザが自社の広告塔になることでメリットが生まれています。

地域と共に歩み、 地域から愛されるクラブへ

支援企業は良き理解者

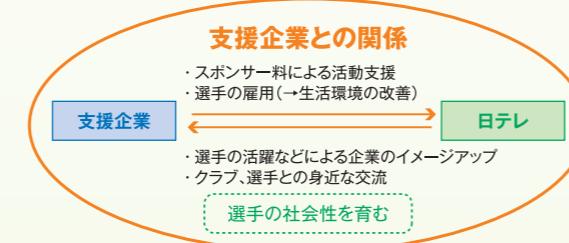
日本テレビが経営から撤退以降、クラブは新たな支援企業の獲得へ動き出しました。企業と新たな関係を築くのは簡単なことではなく、地道に我慢強く「女子サッカーを支援したい」と思ってもらえる企業を探していくしかありません。

日テレの強みは、代表選手を多く輩出していること。鈴木部長は、「場合によつては、クラブ名を出すよりも代表選手の名前を挙げた方が、『あの選手のいる会社ですか』となる。それくらいなでしこジャパンの影響は大きいです」と言います。逆に、代表選手を輩出し続けることで、支援企業との確固たる関係を築けていると言えるかもしれません。現在は、社会人選手の多くが支援企業に社員として雇用されており、自社で働く社員の活躍は、企業に

「女子チームはあって当たり前」のクラブ志向 柔軟なサッカー観を育む、東京ヴェルディとの関係

日テレのもうひとつの強みは、男子チーム・東京ヴェルディとの密接な関係にあります。クラブは創設当初から、サッカーをやりたい女子も積極的に受け入れており、男女が一緒になって練習をしていた時期がありました。しかし、徐々に女子選手が増える中、クラブスタッフは「将来的に女子サッカーも世界に広まっていくのであれば、そのバイオニアになって発展させよう」と考えるようになり、それがきっかけとなって1979年に女子クラブチームを創部、1981年にベレーザが立ち上がったのです。だからこそ、「女子がサッカーをするのは当たり前」という考えがクラブ内に浸透しており、運営スタッフやコーチ陣、選手においても、男女の垣根を越えた交流が生まれています。日テレの竹中百合・運営責任者は、「男女間でここまで距離の近いクラブはあまりないと思います。男子のコーチや選手も女子の試合をよく見ていて、選手にアドバイスをくれます。過去には移籍してきた選手が『こんなにいろんな人の意見を聞けるクラブはあまりない』と驚いていたほど。選手たちは日常的に男子から刺激を

とってもイメージアップや社内の活性化といったメリットを得られます。
また、選手が支援企業の運動会に参加したり、講演会を行うなど、クラブは支援企業への還元も忘れません。そうした交流の場を通して、選手たちの社会性を養う目的もあります。



地域社会への貢献

「駒沢女子大学サッカー教室」の実施

日テレは2010年、共にホームタウンとする稲城市を中心とした地域社会への貢献、人材やリソースの交流による教育機会創出を目的として、駒沢女子大学と「パートナーシップ提携協定」および「ユニフォームスポンサー契約」を締結しました。

それ以前には、他の支援企業と提携し、小学校でのサッカー教室を約8年開催しており、当時のサッカー教室の経験者がクラブの門をたたいていたことから、日テレとしては「小中学生を対象にしたサッカー教室を続けたい」という強い思いがありました。同大学と締結後には、年2回「駒沢女子大学サッカー教室」を開催し、約100人の女子小中学生を対象に日テレの選手たちが指導しています。メニューの内容は選手たち自

身で考えており、女子サッカーの普及のみならず、選手たちの自主性や社会性を育みながら、ホームタウンと温かな交流を図っています。

ホームタウン・多摩市との提携

東京ヴェルディが2012年にホームタウンのひとつ、多摩市と「まちづくりの推進に関する基本協定」を締結。これに伴い、日テレも多摩市と協力し、活力にあふれ、夢と生きがいの持てる豊かなまちづくりを実現させるべく、スポーツを通じた地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。



サッカー教室の様子。写真はなでしこジャパンの阪口夢穂選手



岡山湯郷Belle



運営団体

一般社団法人 岡山湯郷Belle

所在地

岡山県美作市入田436-3

岡山県美作ラグビー・サッカー場内

クラブ理念

「夢みることがなければ、そこからスタートしなければ何も始まらない」
岡山湯郷Belleは、サッカーを通して夢と感動を共有でき、地域の活性化を図るために貢献する組織、または人間を作り育てるこどもを目標に掲げています。サッカーと緑の芝生を通して新しい地域社会の構築(スポーツを中心とした街づくり)に貢献する。

クラブ沿革

2001年 「岡山湯郷Belle」創部(5月)
(Belleは、フランス語で「美人」の意味)
運営母体「美作スポーツ&レジャークラブ」設立(7月)

2003年 日本女子サッカーリーグ加盟(1月)

2009年 「NPO法人岡山湯郷Belleクラブ」設立(3月)

2014年 「一般社団法人岡山湯郷Belle」設立(3月)

アカデミー(育成組織)

小学生からの一貫指導／クラブと高校の融合(日本初)
・岡山県作陽高等学校サッカーチーム女子
・U-18、U-15
・U-12
・スクール

「美作＝みまさか」と呼ばれる日まで

岡山湯郷Belle(以下、湯郷ベル)が発足したきっかけは、日本と韓国で共催された2002年FIFAワールドカップでした。サッカーを通して地域振興を図ろうと考えた岡山県と美作町(当時／2005年3月、合併により美作市)、岡山県サッカー協会は、「岡山県美作ラグビー・サッカー場」を同大会の事前キャンプ地の候補地にすべく、誘致活動をスタートさせました(※)。しかし、当時は、「湯郷(ゆのごう)」や「美作(みまさか)」という地域の読み方すらも浸透しておらず、誘致活動を成功させるため何か町のPRになることはないかと模索していました。そのとき、川淵三郎JFA副会長(当時)から「女子サッカーが面白いのではないか」という提案を受け、美作町は2000年9月、女子チームの創設に乗り出します。

当時、国内トップリーグである日本女子サッカーリーグに加盟するには、全日本女子サッカー選手権大会に出場することが原則でした。岡山県のチームは中国地域代表として同大会に出場していましたが、上位には進出できていませんでした。そのため、県全体で女子サッカーの環境改善を図る必要がありました。そのような状況下、日本女子サッカーリーグ参入を目指す女子チームの立ち上げは、岡山県女子サッカーの発展へのきっかけとなり、さらには、地域振興にも直結することから大きな期待が寄せられていました。

というのも、5面のピッチを有する美作ラグビー・サッカー場のすぐ近くには湯郷温泉があります。美作ラグビー・サッカー場を拠点とする全国トップレベルの女子チームが誕生すれば、チームと共に美作の知名度も

上がり、温泉施設の利用客増加といった地域全体の活性化が見込まれたからです。

こうして、美作町は誘致活動と並行して、教育委員会スポーツ振興課に事務局を置き、官・民一体となった町おこしプロジェクトをスタート。2001年5月31日、湯郷ベルが創設されました。

2002年に全日本女子サッカー選手権大会に初出場した湯郷ベルは、翌年に日本女子サッカーリーグへ加盟、2004年に同リーグの2部リーグ(当時)を制すると1部に昇格。わずか4年でトップリーグに上り詰めました。

*2000年11月に2002FIFAワールドカップ日本組織委員会から公認キャンプ候補地に承認。
2002年、スロベニア代表の事前キャンプ地に決定

表1

美作市(旧美作町)における女子サッカーチーム創設のメリット

- ・全国規模の美作市の広報活動
- ・「美作市=温泉とサッカー」という個性的特色の定着
- ・各種サッカー大会・リーグ戦開催における宿泊利用者の増大
- ・若年層人口増加に伴う地域活性化
- ・若い労働力の確保
- ・地元チームを応援することによる市民の連帯感

地域の人々を巻き込んだチームづくり

湯郷ベルは現在(2014年6月時点)、自治体からの補助金、支援企業からのサポート、ファンクラブの支援などによって運営されています。

行政の町おこしから誕生したこともあり、湯郷ベルは当初から、地域の人々とのつながりを重視したチームづくりを行ってきました。当時、湯郷ベルの部長を務めていた黒田和則GMは、「行政を動かすには世論を味方につけることが大事」と言います。地域に必要な存在だと認められれば、自治体の補助金などを確保でき、チームを存続させることができるからです。しかし、チーム創設にあたっては、地域の理解者を容易に得ることはできませんでした。なぜなら、女子チーム創設に関する情報は、地域住民にもうまく伝達できておらず、美作町議会の理解も十分ではなかったため、事務局との間に温度差が生じていたからです。選手はアマチュアであるため、湯郷温泉のホテルや旅館、地元企業などで雇用できればと考えていた事務局は、まず、「湯郷温泉女将の会」(湯郷温泉旅館の女将により結成された団体)に働き掛けて協力を要請、趣旨を伝えて選手たちの受け入れに承諾を得ます。その他にも、湯郷温泉旅館協同組合や観光協会などの支援も受け、選手を迎える体制を整えることができ、クラブの存在は地域住民に浸透していきました。現在は支援企業も増えており、選手たちはそれぞれの受け入れ先で仕事をしながら、サッカーに励んでいます。

表2 湯郷ベルの収入の柱

- | | |
|-------------|--------------|
| ・自治体の補助金 | ・ファンクラブ会員年会費 |
| ・支援企業による支援金 | ・支援自動販売機 |

美作市に暮らす選手たち

「地域と共に生活するチームをつくりたかった」と黒田GMは言います。それは、地域における“チームの存在価値”を高めるため。実際、湯郷ベルの選手たちは皆、美作市や近隣町村に住民登録をし、前述したように温泉旅館や市内あるいは近隣の企業に勤務しています。勤務先の理解もあり、16時からの練習に間に合うような就業時間になっています。

職場ではもちろん、選手が飲食店やスーパーに行けば、自然と地域の人々とあいさつをする機会が増えます。地域の人々も日常的に選手と触れ合い、仕事とサッカーの両立に励む選手の姿を見るうちに共感を覚え、湯郷ベルという存在は現在、地域に定着しています。これまで築き上げてきた官・民一体のアットホームな関係こそが、湯郷ベルの特色であり、魅力のひとつとなっています。

◇ファンクラブ

2001年発足時はわずかな会員数でしたが、現在では2000~3000人が加入。美作市の人口約3万人の1割の住民がファンクラブ会員として湯郷ベルを支援しています。

◇Belle支援自販機

2003年より設置。売上金の一部が湯郷ベルの活動支援金となります。支援金は年間で約1000万円に達し、総運営費の1割を占めています。



支援企業でもあるコカ・コーラウエストの提案により導入。
湯郷ベルのチームカラー仕様



ホームゲームでは地域のボランティアの方々が運営をサポート

「市民権」を得た湯郷ベル

初年度となる2001年度、美作町の補助金は500万円でした。しかし2006年度の全日本女子サッカー選手権大会で準優勝の成績を収めたことで、湯郷ベルは名実とも“全国区”に。2007年度には、美作市の意向により補助金が1500万円へと大幅にアップしました。このとき黒田GMは、「これで湯郷ベルは『美作市の市民権を得た』」と感じたそうです。“美作地域の広告塔”として、湯郷ベルが地域に不可欠な存在になったことを証明する出来事でした。現在は、県・市あわせて約2000万円の補助金が交付されており、補助金以外にもさまざまなサポートを受けています(表3参照)。

表3 補助金以外の行政によるサポート (2014年6月現在)

- ・監督(1人)を期限付きの美作市職員として雇用
- ・選手(2人)を美作市内の小学校の学校支援員として雇用
- ・岡山県体育協会・スポーツ推進委員(選手1人)を美作市で雇用
※県体協からの派遣による。該当選手は1ヶ月の半分をスポーツ振興に務め、それ以外の半分は自身の競技力向上に活用できる
- ・美作市教育委員会スポーツ振興課内にチーム事務局設置および専任の市職員(1人)を登用
- ・岡山県美作ラグビー・サッカー場(ホーム競技場)の優先使用
- ・県、市議会議員のサポートー組織化

◇FIFA女子ワールドカップ優勝の経済効果

2011年FIFA女子ワールドカップ優勝後、美作市でなでしこジャパンの代表合宿が1週間実施されました。このとき美作地域にもたらされた経済効果は、一次効果が6億5000万円、二次効果が約2億円、さらに付随する雇用などを含めると総計10億円にも達しました。また、連日メディアに多く取り上げられたことで、美作市や湯郷温泉の知名度も全国的にアップ。そのPR効果は100億円とも言われています。なでしこジャパンの中核を担う宮間あや選手、福元美穂選手がチームに在籍していたことから、支援を申し出る企業も増加しました。

◇地元・岡山県作陽高等学校を下部組織に

湯郷ベルは、U-12、U-15、U-18アカデミーのほかに岡山県作陽高等学校サッカーチーム女子部を下部組織としてチーム登録し、湯郷ベル出身のコーチ陣のもと選手育成を行っています。湯郷ベルの下部組織であることから同校に入学を志願する選手も増え、中学卒業後もサッカーを続けたい女子選手の受け皿となっています。



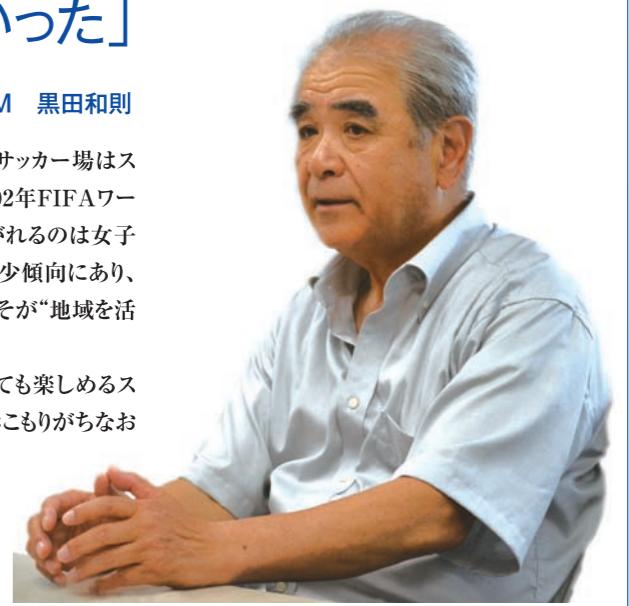
加戸由佳選手は岡山県作陽高等学校サッカーチーム女子出身

「女子チームだからうまくいった」

岡山湯郷 Belle GM 黒田和則

湯郷ベルは、女子サッカーだからうまくいったと言えます。美作ラグビー・サッカー場はスポーツの拠点で、すぐ近くに湯郷温泉という宿泊施設があることが強み。2002年FIFAワールドカップをきっかけとした地域復興を考えたとき、より早くトップリーグに上がれるのは女子サッカーしかありませんでした。一方、1990年代より湯郷温泉の利用客は減少傾向にあり、そこにサッカーという“異質”なものを掛け合わせて町おこしを図った。それこそが“地域を活性化”することだと私は思います。

また、女子サッカーは男子ほど試合展開が速くないため、お年寄りが見ても楽しめるスポーツです。ですから湯郷ベルのお客さんは80~90歳の方が多い。家に引きこもりがちなお年寄りが減り、元気と健康を維持し、医療費の削減に貢献しているほどです。そして、美作ラグビー・サッカー場は車がないと不便な場所にあることから、試合のある休日には家族そろって会場を訪れます。何度も会場に足を運べば顔見知りが増えて、そこで会話が生まれる。つまり、“コミュニティーの再生”の場となっています。湯郷ベルは、もはや美作市になくてはならない存在になったと言えるでしょう。



「支援企業は、知り合いを伝って紹介してもらった」と黒田GM。チーム発足以降、支援企業とは顔と顔を突き合わせた関係づくりを大切にしている

支援企業と連携し、伝統を守り続けるクラブ



伊賀フットボールクラブくノ一



運営団体

特定非営利活動法人伊賀FCくノ一

所在地

三重県伊賀市土橋61番地

クラブ理念

女子サッカーの競技力の向上を糧として、地域コミュニティの核となり、スポーツ文化の創造、ならびに健康で文化的な地域社会の構築に寄与する。

クラブ沿革

1976年 「伊賀上野くノーサッカークラブ」創部
1989年 プリマハム株式会社がスポンサーとなり、「プリマハム FCくノ一」として活動
日本女子サッカーリーグ加盟
2000年 スポンサーが撤退。市民クラブとなり、「伊賀フットボールクラブくノ一」に名称変更
2012年 「特定非営利活動法人伊賀FCくノ一」として法人化
株式会社エクセディとスポンサー契約を締結。多くの選手が同社の嘱託社員に。

アカデミー(育成組織)

伊賀フットボールクラブくノーサテライト(中学生～社会人)
伊賀フットボールクラブくノージュニア(小学生)
伊賀フットボールクラブ サッカースクール

日本女子サッカーリーグに第1回大会から参加

伊賀フットボールクラブくノ一(以下、伊賀FC)は1976年、三重県・伊賀上野くノーサッカークラブが地元の中学生を組織して「伊賀上野くノ一」として活動を開始しました。88年にはプリマハム株式会社がメインスポンサーとなり、「プリマハムFCくノ一」に改称しチーム強化が図られました。日本女子サッカーリーグには1989年の第1回大会より参加し、以降同リーグを2回制覇、全日本女子サッカー選手権大会も3度の優勝を成し遂げ、森川(旧姓・内山)環、宮本(旧姓・三井)ともみ、山岸靖代ら多数の日本女子代表選手を輩出。しかし1999年、企業スポーツの撤退が相次ぐ中、プリマハムもスポンサーから撤退。2000シーズンからは地元サッ

カーチェリヤーの熱意によりチーム名称を現名称に変更し、企業チームから市民クラブへの転換を遂げて再スタートを切りました。

2000年以降、地元支援企業からの協賛金、有志による後援組織からの資金提供、自治体からの強化費などによりクラブの運営を行ってきましたが、社会人選手は地元企業での勤務を、学生の選手は学校での授業を終えてからトレーニングを行うなど、活動環境は決して十分とは言えませんでした。かつてはリーグの上位争いをしていた伊賀FCでしたが、チーム力の低下は否めず、2010シーズンには最下位となるなど、苦しい時代を過ごしてきました。

エクセディによる選手の雇用

2011年7月、なでしこジャパンのFIFA女子ワールドカップ優勝に伴い、女子サッカーへの注目度が向上し、伊賀FCにも大きな転機が訪れました。自動車用クラッチ製造最大手の「株式会社エクセディ(本社:大阪府寝屋川市)」から支援の申し出がきたのです。支援企業の拡大に苦心していた伊賀FCは、現行の支援企業への説明と理解を求める傍ら、エクセディと支援内容などの協議を進め、2012シーズンから同社がユニフォームスポンサーとなること、ホームタウンである伊賀市の上野事業所にて選手たちの雇用を確保することを柱とする支援策が決まりました。

プロ契約ではない選手を抱えるクラブの場合、安定した収入の確保はじめとする生活面での不安を取り除き、サッカーに打ち込める環境を整えることが、運営上の最重点課題となります。伊賀FCでも2011年ま

では平日のトレーニングを夕方以降に実施し、終了後に食事をとる生活を送っていましたが、コンディション維持は難しい状態でした。

当初、伊賀FCはエクセディに10人程度の採用を依頼しましたが、同社の意向により、最終的に所属選手ほぼ全員を社員として採用(勤務時間は8時10分から14時まで)。15時以降のトレーニングが可能になり、休養や睡眠もしっかりと取れるようになりました。

伊賀FCの初矢千秋・事務局長は、「選手たちに時間の余裕ができ、気持ちにも余裕が生まれた」と言います。これらの環境の改善は、2013年のリーグ4位、全日本女子サッカー選手権大会ベスト4という結果にもつながっています。

スポーツ支援による社内の活性化

エクセディは世界23カ国で生産・販売など企業活動を展開しているグローバル企業で、民族・文化・宗教が異なる1万7400人を超える従業員が働いています。清水春生・代表取締役社長は「この会社で働いて良かったなと従業員に思ってもらえる会社にしたい」という理想を描いています。「全従業員が同じ理想を持ち、喜びを感じて働いてくれることで、企業としての成長も図れる」と清水社長は考えており、「一体感」「知名度」「やる気」という3つのキーワードを掲げ、生産増強など企業活動に直結しない分野にも積極的に投資を行い、QCサークル活動(※)や人材育成、厚生施設の整備など、さまざまな活動を進めています。その一つが『スポーツ支援』です。スポーツ支援は同社の知名度向上に直結し、清水社長も「従業員たちの帰属意識が高まるとともに、職場の仲間がスポーツで頑張っている姿は他の社員たちへの刺激になる。だからスポーツ、特に女性アスリートへの支援を続けていきたい」と手応えを感じています。現在、伊賀FCの選手たちは、卓球部の選手などと同様、各部署での従業員と共に業務に勤しんでいます。

※同じ職場内で小集団改善活動を自発的に小グループで行う活動



業務に、そしてサッカーに真摯に取り組む伊賀FCの選手たちの姿は、エクセディの多くの従業員にとって刺激になっている

■現場の声

・株式会社エクセディ 代表取締役専務執行役員 久川秀仁

「真面目に明るく、働いてもらっています。一般的従業員たちも伊賀FCや彼女たちを“仲間”と見ているから、応援している。職場の一体感も強まっていますね。」

・伊賀フットボールクラブくノ一 那須麻衣子 選手

「部署のみんなが応援してくれるので、やり甲斐もあるし、力にもなる」
(「社内報ステップ Vol.330 / 2013年8月」より抜粋)

「女性アスリートは会社の発展に欠かせない存在です」



株式会社エクセディ
代表取締役社長 清水春生

女子サッカーとの出会いは、2011年のFIFA女子ワールドカップでした。ひたむきに戦うなでしこジャパンの選手たちの姿に感激したんです。それからメディアを通して、女子サッカーの選手たちの境遇などを知るようになりました。私たちの会社には以前より女子卓球部や自動車レース(F3)で活躍する女性アスリートたちが働いており、女子サッカーもサポートしようと決めて一気に動き出しました。

伊賀FCの選手たちも、他の競技の選手たちと同じように、日中は私たちの仲間として働いてもらっています。日々の業務はもちろんのこと、QCサークル活動や社内行事などにも積極的に参加し、楽しんで働いているようです。

スポーツをしている女性たちは明るくて活発、リーダーシップもあります。私は、現役を引退しても会社に残って長く働いてほしいと願っています。スポーツで培った彼女たちの力、エネルギーは、私たちが目指している会社の具現化に欠かせない存在です。

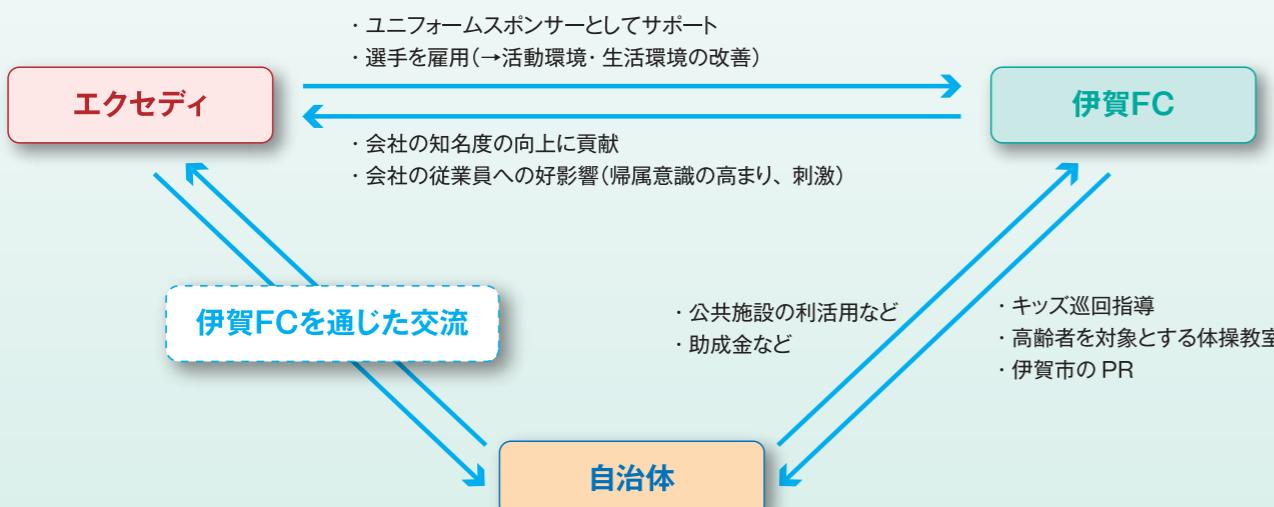
「女性のパワーをもっと会社で生かしていきたい」と語る清水社長

二者の連携により生まれた新たな効果

エクセディと伊賀FCの連携は、地域社会にも新たなムーブメントを生み出しています。伊賀FCは上野運動公園やブリマハム三重工場のグラウンドを練習場としてきましたが、より良いトレーニング環境の整備のために、数年前から新たな活動拠点の創設に取り組んできました。市内で廃校になった中学校の校庭を芝生化して練習場にし、体育館などの付帯施設も利用。空いている時間帯は地域の活動に開放する案を伊賀市役所に働きかけていました。エクセディもこの動きに賛同し、ともに積極的

に行政に働きかけたことで大きく前進。現在、整備工事が進んでおり、その完成が待たれるところです。

自治体や地域社会との新しい関係も構築され、伊賀FCは2014年から伊賀市の観光大使として観光事業に協力するなど同市PRの一翼を担っています。エクセディも伊賀FCを通じて県内スポーツ界や教育界との交流を深め、従業員の新規採用などにおいて協力関係を築いています。



地域密着型スポーツクラブとしての活動をスタート

伊賀FCは、ほかにも地元の企業・団体の支援を受けています。地元スポーツクラブのトレーニング施設の無償利用や温泉施設の優待など、各種サービスの提供は選手たちのコンディション維持などに大きく寄与しており、活動環境の整備・充実に重要な役割を果たしています。

2012年に特定非営利活動法人になったことで県や市の助成事業の受託も可能になり、地域密着型スポーツクラブとして本格的に活動を開始しました。伊賀FCの山村清・統括部長は、「多くの方々の協力により選

手たちの環境が改善され、感謝している。しかしながら課題もある」と話しています。

現在、伊賀FCは、リーグ優勝を狙えるチームに再建するとともに、将来的には高齢者も楽しめる競技を加えて、名実ともに「総合スポーツクラブ」となることを目指して活動しています。そのためには、クラブの財政基盤を盤石なものにし、育成組織を充実させ、専従スタッフを確保することなどが今後の課題となっています。

日本女子サッカーリーグの挑戦

ここまで日テレ・ベレーザ、岡山湯郷Belle、伊賀フットボールクラブノーノー、それぞれの創設経緯や活動内容などについて紹介してきました。国内の女子トッププレーヤーの多くは日本女子サッカーリーグ加盟チームに所属し、リーグ戦を通して切磋琢磨しています。リーグ全体の競技力が向上すれば、より拮抗した試合が増え、チーム、指導者、選手は成長を遂げることができます。

日本女子サッカーリーグは、日本女子サッカーの普及・発展のみならず、各年代の日本女子代表選手の強化の場としての役割を担っています。プレーする側にとっても、観る側にとっても、魅力あるリーグを目指して、日々挑戦を続けています。

日本女子サッカーリーグの変遷

【主な出来事】 ※○:リーグ関連

1979年 日本女子サッカー連盟 設立
1980年 全日本女子サッカー選手権大会 創設
1981年 日本女子代表チーム初編成
1989年 日本女子サッカー連盟が、JFA5種委員会(現・女子委員会)に移行
○日本女子サッカーリーグ 開幕

日本女子トップリーグの幕開け

1991年 第1回FIFA女子世界選手権(現・FIFA女子ワールドカップ)の新設と、1990年第11回アジア競技大会で女子サッカーが正式種目となることを受け、代表チーム強化を視野に入れた全国リーグを創設。

1994年 ○リーグの愛称が「Lリーグ」に決定

2002年 第1回FIFA U-19女子世界選手権(現・FIFA U-20女子ワールドカップ)開催

2004年 ○1・2部制を導入

日本女子代表チームの愛称が「なでしこジャパン」に決定

○リーグの愛称が「なでしこリーグ」に決定

2007年 「なでしこVision」発表

世界のなでしこになる。

日本サッカー協会は、日本女子サッカーのさらなる発展のため、「世界のなでしこになる。」というビジョンのもと、3つの目標「1. サッカーを日本女性のメジャースポーツにする」「2. なでしこジャパンを世界のトップクラスにする」「3. 世界基準の『個』を育成する」を定めた。

2009年 ○5ヵ年計画「なでしこリーグ改革」がスタート(～2013年)

“国内最高峰”的なでしこリーグへ

なでしこVisionとリンクし、「女子サッカーの競技力向上」「リーグ運営力強化」「女子サッカーの普及活動」を三本柱とするリーグ改革に着手。

国内最高峰のリーグ「なでしこリーグ」と、なでしこリーグへの登竜門「チャレンジリーグ」に再編成し、それぞの位置付けを明確にすることでリーグの充実を図った。

2010年 第1回FIFA U-17女子ワールドカップ 開催

2011年 なでしこジャパン、FIFA女子ワールドカップ ドイツ2011初優勝

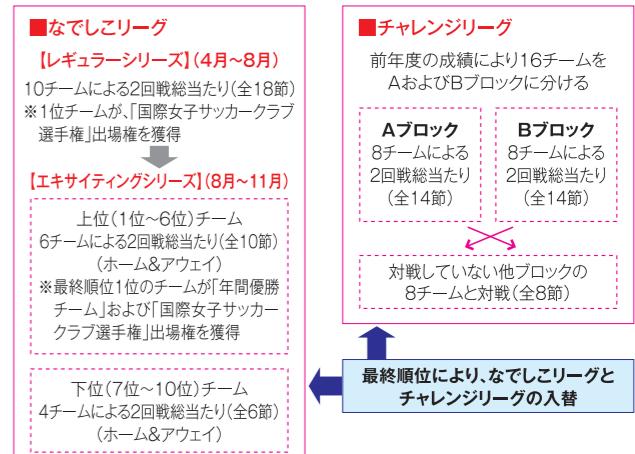
2012年 ○mobcast cup 国際女子サッカークラブ選手権(第1回)開催
なでしこジャパン、ロンドンオリンピック銀メダル獲得

2014年 ○「2014-2016の改革～3ヵ年構想」を打ち出す
U-17日本女子代表、FIFA U-17女子ワールドカップ
コスタリカ 2014初優勝

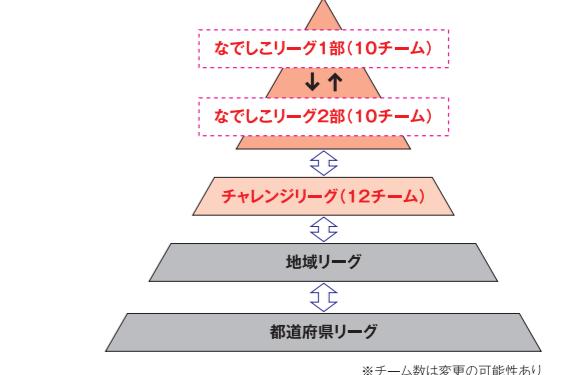
2015年以降のリーグ構想

2014シーズンよりなでしこリーグに2ステージ制を導入しなでしこリーグ・チャレンジリーグともにより白熱した試合が繰り広げられています。2015シーズン以降は、なでしこリーグを2部制にし、チャレンジリーグは「なでしこリーグ昇格を目指すチーム」と「レベルの高いチームとの試合を通じて強化を図るチーム」と、目的を明確にし、各チームのレベルと方向性に沿ったリーグ環境を整備。日本女子サッカーの包括的なレベルアップを目指します。

2014シーズン 大会方式



2015年以降 リーグ構想



【参考】各年代日本女子代表の世界大会スケジュール(～2020年)

2015年	FIFA女子ワールドカップ(カナダ)
2016年	オリンピック(リオデジャネイロ/ブラジル) FIFA U-20女子ワールドカップ(未定)
2018年	FIFA U-17女子ワールドカップ(ヨルダン) FIFA U-20女子ワールドカップ(未定)
2019年	FIFA U-17女子ワールドカップ(未定)
2020年	オリンピック(東京) FIFA U-20女子ワールドカップ(未定) FIFA U-17女子ワールドカップ(未定)

学校法人と提携し、独自のシステムを確立



現役大学生がトップレベルに挑戦
愛媛FC レディース



運営会社

株式会社愛媛FC

所在地

愛媛県松山市福音寺町230

クラブ理念

- ・青少年や子供たちに夢と希望と感動を与える
- ・愛媛のサッカーのレベルアップに努める
- ・地域経済の活性化に貢献する
- ・サッカーを通じて全国に愛媛の情報を発信する

クラブ沿革

- 2008年 環太平洋大学短期大学部と提携開始
2009年 「環太平洋大学短期大学部 女子サッカー部」創部
2011年 「愛媛FCレディース」創部
2012年 日本女子サッカーリーグ加盟

アカデミー(育成組織)

なし

提携がもたらしたプラス

選手が大学に在籍しながらチャレンジリーグに出場できること以外にも、愛媛FCがIPUと提携したことによって、さまざまなメリットがもたらされています。

特に大きいのが財政面です。IPUの運営団体である「学校法人 創志学園」が、EFCLの運営費の一部を支援し、クラブにかかる負担を軽減しています。大学とクラブは「持ちつ持たれつ」の相互関係を築いており、IPUに属する選手がEFCLとして遠征する場合はEFCLが費用を負担。これによって、大学生の選手一人当たりの負担を年間約100万円抑えることができます。また、IPUには高校時代にスポーツで優秀な成績を残した学生の授業料を半額免除する「スポーツ奨学金制度」があります。実績のある選手がサッカー部に入部すれば、大学やクラブだけでなく、選手自身にとってもプラスとなります。

こうした工夫を重ねた結果、今ではサッカー部への入部希望者が増加。大学とクラブが手を組むユニークな運営方法が注目され、EFCLのメディアへの露出およびIPUの認知度アップにつながっています。



選手たちは学生にしてトップレベルを肌で感じることができます

チーム発足の経緯

愛媛FCレディース(以下、EFCL)は、宇和島市にある環太平洋大学短期大学部(以下、IPU)の学生や、同大学の卒業生を軸に構成されています。チームの転機は2008年3月でした。県内サッカー人口の拡大を目指す株式会社愛媛FC(J2・愛媛FCの運営会社)と、少子高齢化が進む宇和島市をサッカーの力で盛り上げようと考えたIPUが、IPU卒業生でEFCLを編成する提携策をスタートさせます。

提携の内容は、愛媛FCによる①2009年春のIPU女子サッカー部の立ち上げとチーム管理の協力、②地域スポーツ振興および文化振興での協力、③日本女子サッカーリーグを目指すチームの立ち上げと運営の相互協力、④大学での公開講座や、インターンシップの受け入れによる学生の育成と人材交流、の4点です。

女子サッカー部を創部した2009年は、IPUの1期生(大学1年生)のうちEFCLへの入団を希望したのはわずか5人で、チームを編成できない状態でした。愛媛FCはセレクションを実施して、外部から選手を勧誘することも考えましたが、それでは「2011年にIPUの卒業生を中心にクラブを創設する」という目標がかなわなくなります。

打開策を模索した末、IPU女子サッカー部の選手たちはEFCLに登録してシーズンを戦いながらも、登録変更をせずに12月の全日本大学女子サッカー選手権大会にも出場できることを知ります。こうして2011年、選手たちは全日本大学女子サッカー選手権大会とチャレンジリーグの両方に挑戦する第一歩を踏み出したのです。

困難を乗り越えて創設

2008年に愛媛FCとIPUが提携してから、EFCL創設に向けた道のりは平坦なものではありませんでした。運営費を集めること、練習場を確保することはもちろん、IPUの所在地である宇和島市から約100km離れたEFCLのホームタウン・松山市までどのように通うかという地理的な問題にも直面しました。

特にIPUを卒業した後の選手の進路には、クラブも大学も苦心しました。ただでさえ就職するのが難しい上、選手たちは土曜日、日曜日、そして祝日に公式戦や練習試合があるため、休日出勤も不可能、サッカーを続けるには条件付きの勤務体系を余儀なくされます。女子サッカーに理解を示し、そうしたさまざまな要望に応えてくれる就職先を探す作業は困難を極めました。

それでも、地域密着の理念を掲げる愛媛FCが支援企業とかけ合い、

卒業生の就職先を確保。2012年には卒業生全員の進路が内定するなど、学生生活を終えた後もサッカーを続けられる環境が整いました。

ある社会人選手の一日	
06:30	起床、朝食、準備
07:30	出勤
08:10	午前勤務
12:00~13:00	休憩、昼食
13:00~17:10	午後勤務
17:30	帰宅、練習の準備
19:00~21:00	練習
21:30~23:00	筋トレ、ケア、ジムにて入浴
23:00	帰宅、洗濯
24:00	就寝



阿久根真奈選手も、IPUを経てEFCLに入団した選手の一人

IPU出身選手の声

大迫華子 選手

「学生時代、なでしこリーグの昇格を目指すチームで練習に取り組むことができました。ただ大学のクラブ活動をするのではなく、高いモチベーションでプレーできたと思います。何より、卒業後にサッカーを続ける道、その環境があることにありがたみを感じます」

春山沙織 選手

「IPUで2年間、一緒に練習した仲間とサッカーを続けられることがうれしいです。また、EFCLの一員としても活動していたため、卒業した後もプレースタイルなどを変えることなく、学生時代に学んだことをそのまま生かせることが魅力だと思います」

将来を見据えた環境づくり

EFCLはIPUと手を取り合ってクラブと選手を育てるだけではなく、地域との関係も深めています。選手たちは自治体が主催するお祭りや駅伝大会などさまざまな行事に参加。フットサル教室や女子小学生向けのスクールを開催するなど、地域に根ざした活動に力を入れています。

EFCLはホームタウンで開催される2017年の国民体育大会に、愛媛県の代表チームとして出場することが決定しています。自治体や県サッカー協会から、選手の就職先を斡旋してもらいつつ、強化費の一部を負担してもらうなど手厚いサポートを受けています。このチャンスを生かして地域との関係をさらに深め、女子サッカーの普及につなげるにはどうすべきか。チームは現在、EFCLを株式会社愛媛FCから分離し、法人化する構想を持っています。女子チーム独自の支援企業やファン層の獲得を目指して運営することが、女子サッカーの普及、ひいては地域経済の活性化にもつながると考えています。



EFCLは、女子チーム独自の支援企業やファン層の獲得も視野に入れている

学校法人と提携し、
独自のシステムを確立



学生たちと共に地域の女子サッカー活性化を図る アルビレックス新潟レディース



運営会社

株式会社アルビレックス新潟

所在地

新潟県新潟市中央区美咲町2-1-10

クラブ理念

- ・未来のある子供たちに「夢を与える人づくり」に貢献します。
- ・地域の人々と共に「活気あふれるまちづくり」に貢献します。
- ・地域と世界を結ぶ「豊かなスポーツ文化の創造」に貢献します。

クラブ沿革

2002年 「アルビレックス新潟レディース」創部
2004年 日本女子サッカーリーグ加盟

アカデミー(育成組織)

- ・アルビレックス新潟レディースU-18
- ・アルビレックス新潟レディースU-15

JAPANサッカーカレッジとの連携

アルビレックス新潟レディース(以下、新潟L)の運営会社である株式会社アルビレックス新潟は、サッカー以外にもバスケットボール、チアリーディング、スキー・スノーボード、ランニングクラブ、野球、レーシングチームなどと名称を共有しており、スポーツを通じて豊かで幸せな街をつくることを目指して、地域に根ざした活動を展開しています。

新潟Lは2002年4月、J2・アルビレックス新潟(当時)の女子サッカーチームとして結成され、2004年から日本女子サッカーリーグに加盟しています。設立にあたっては、2009年に開催される新潟国体に向けて強化を図りたい自治体とクラブの意向が一致。選手の雇用や公共施設の利用などにおいて自治体の協力を得られたことが大きな後押しとなりました。

社会人の選手は、チーム結成当初、主に新潟県体育協会や市内スポーツ施設などを管理している新潟市開発公社などに雇用されていましたが、国体終了後は地元の支援企業やチームスポンサーなどに勤務するケースが増え、それぞれの環境で仕事とサッカーを両立させています。練習は週6日、17時半~19時半にクラブハウスに隣接している新潟聖籠スポーツセンター・アルビレッジで行っており、練習後はそのまま敷地内のレストランで食事をとり、体をケアすることができます。

ただ、設立当時は専用のトレーニング施設がなかったため、「学校法人国際総合学園 JAPANサッカーカレッジ」(以下、CUPS)の施設を借りていました。CUPSは、2002年に聖籠町に設立されたサッカーの専門学校で、選手やコーチ、レフェリー、トレーナーなどの養成学科やサッカービジネスに関する学科のほか、高等部(※)も備えています。かつては新潟Lの選手がCUPSに学生や教務スタッフとして受け入れられていましたが、現在はCUPSの学生がアルビレックス新潟(男女)の練習や練習試合

に参加したり、研修の一環としてホームゲームの運営をサポートするほか、アシスタントコーチやアシスタントトレーナーとして実地経験を積んだり、フロントでのインターンシップを行うなど、さまざまな形の連携が双方にメリットをもたらしています。なお、CUPSが属する教育・医療福祉機関(NSGグループ)の代表は株式会社アルビレックス新潟の池田弘・取締役会長が務めていることから、グループ内での包括的な連携が可能になっています。

*高等部は、学校教育を単位制・通信制の「学校法人大彦学園 開志学園高等学校」と提携を行っています。高等部女子は単独チームの「開志学園JAPANサッカーカレッジ高等部女子」のほか、女子サッカー専攻科との合同チーム「JAPANサッカーカレッジレディース」(チャレンジリーグ)でプレーすることもできます。また、新潟Lでプレーするチャンスもあります。



新潟Lのホームゲームでは、CUPSの学生が運営のサポートをしている

新潟医療福祉大学との連携

2007年より、CUPSと同じNSGグループの「新潟医療福祉大学」による選手の受け入れがスタートしました。これにより、新潟Lの選手は、大学で一般教養や運動・スポーツに関するさまざまな知識を身につけながら、なでしこリーグでプレーすることが可能になりました。同大学からは、現在も新潟Lでプレーし、なでしこジャパンにも選出された山崎円美選手、小原由梨選手ら6人が卒業しています。

この提携の特色は、大学に在籍しながらなでしこリーグにも出場できること。新潟Lにとって、選手のスカウティング時に働きたい選手には就職先を、サッカーをしながら勉強もしたいという選手には大学進学という選択肢を提示できることは、大きな強みとなりました。大学側にとっても、単に学生を確保できるというだけでなく、新潟Lとの連携を通じて得られる有益な情報や専門知識、技能の取得が、大学の特色のひとつにもなっています。

2012年には同大学に、チャレンジリーグ入りを目指す単独の女子サッカーチームが創設されました。女子サッカーチームの部員が新潟Lの練習に参加したり、練習試合を行なうなど良好な協力体制を築いています。

「新潟で育てた人材を新潟に還元し、サッカーの発展に寄与していく」。アルビレックス新潟レディースはJAPANサッカーカレッジや新潟医

療福祉大学とともに、新潟の子どもたちがそれぞれの夢や目標の実現に向けて、県内で自分に合った道を選択でき、才能を伸ばしていくける仕組みづくりを目指しています。



なでしこジャパンに選出されたFW山崎円美選手も新潟医療福祉大学に在籍していました

Jクラブのアカデミーとして、地域に根ざし、トップ選手の輩出を目指す

新潟Lは2005年にU-18、2013年にU-15のチームを立ち上げました。Jクラブのアカデミーであるため、トップチームも含め、栄養補給やケアなどの面でも男子のプロ選手と同様に恵まれた環境にあり、効果的なトレーニングを実践しています。2006年に新潟Lがなでしこリーグディビジョン2(当時)を制したのを機に、女子の管轄が普及部から強化部になり、GKコーチを専属にするなど体制が強化されました。

一方、幼稚園や小学校への巡回指導に参加したり、試合前後にクリニックを実施したりして地元の子どもたちと触れ合い、県内の女子サッカーの普及にも努めています。すそ野を拡大し、県の出身選手がレディースチームに昇格して将来的になでしこジャパンに選出されるような育成を目指しています。



新潟LのU-18は、CUPSの高等部とともにトップチームの試合で「前座」を行うこともある

支援企業・団体とのつながり

新潟Lの活動は、多くの支援企業・団体に支えられています。中には、「スポンサーは難しいが、選手の雇用なら協力できる」と申し出てくれるところもあり、現在、新潟市や聖籠町の16の企業・団体が選

手を受け入れています。選手は他チームに移籍しても、新潟を訪れるたびに元の職場に顔を出すなど、良好な関係を築いています。

各地で芽吹く新生クラブ



目指すは「究極の育成型」

セレッソ大阪堺レディース



運営団体

一般社団法人セレッソ大阪スポーツクラブ

所在地

大阪府大阪市此花区北港緑地1-2-25

クラブ理念

- ・世界を舞台に活躍できる選手を育てること
- ・補強型ではなく、「究極の育成型」を目指す

クラブ沿革

- 2005年 セレッソ大阪サッカースクール長居校に女子クラブを創設
2010年 セレッソ大阪アカデミーのチーム「セレッソ大阪レディースU-15」として創部(4月)
2012年 「セレッソ大阪レディース」に改称(4月)
2013年 「セレッソ大阪堺レディース」に改称(4月)
下部組織として「セレッソ大阪堺ガールズ」を発足
日本女子サッカーリーグ加盟

アカデミー(育成組織)

- ・セレッソ大阪堺ガールズ(中学生)

「自前での選手育成」がポリシー

セレッソ大阪(C大阪)は、香川真司選手や山口蛍選手、そして柿谷曜一朗選手など日本代表選手を次々と輩出しているJリーグ(J1)加盟クラブです。選手の育成へのこだわりはクラブ全体に浸透しており、女子選手の育成にも余念はありません。2010年には、女子チームを創設。女子チームでは原則として補強は行わず、毎年セレクションで加入した中学1年生の選手をアカデミーで育ててチームを編成するという、「究極の育成型」を目指しています。

女子チームは創設して以降、着実にステップアップを重ね、2013年にはチーム名を「セレッソ大阪堺レディース」(以下、C大阪堺)に改称し、初めてチャレンジリーグに参戦しました。アカデミー出身の選手のみで構成された若いチームはチャレンジリーグで奮闘を続けています。

また、2014年に開催されたFIFA U-17女子ワールドカップ(コスタリカ)には、C大阪堺から西田明華選手と松原志歩選手が出場し、チームの

初優勝に貢献しました。「世界基準による選手の育成」「世界で戦える選手を育てる」という方針の下での育成は、着実に成果を挙げています。



選手全員が10代。チームはアカデミー出身の選手のみで構成される

育成を重要視する理由

C大阪堺が、選手を補強せず、中学生からの一貫指導を徹底しているのには理由があります。大阪府は女子サッカーが盛んではなく、女子の人団を盛り上げていくために、「究極の育成型」を宣言したのです。

また、女性指導者の育成にも注力しており、「女子チームには女性の指導者が必要」「指導者の育成を行わなければ良い選手は生まれない」という考え方の下、現在は3人の女性コーチ陣が奮闘しています。

そこで、クラブとしては、「(選手は)原則、アカデミー出身者に限定する」という言葉を用い、「大阪をホームタウンとする選手を育てる」という

狙いを強調。つまり、C大阪堺が目指したのは「地元・大阪市、堺市に根ざし、地域の人々に愛されるクラブ」になることであり、大阪の女子サッカーワールドを盛り上げていくために、「究極の育成型」を宣言したのです。

また、女性指導者の育成にも注力しており、「女子チームには女性の指導者が必要」「指導者の育成を行わなければ良い選手は生まれない」という考え方の下、現在は3人の女性コーチ陣が奮闘しています。

選手を育て続ける仕組みづくり

C大阪は2010年に「一般社団法人セレッソ大阪スポーツクラブ」を設立し、2012年2月1日には、大阪サッカーライブ株式会社より育成事業を移管。育成組織を法人化して独立させるというJクラブ初の試みを行いました。

この構想が持ち上がったのは、男子のトップチームがJ2に降格していた2007年頃のことです。J2にいながら、どのように育成に力を注ぐべきかを考えた末、組織そのものの形態を変え、『継続的に選手を育成するシステム』をつくろうという結論に至りました。

一般社団法人を設立する上で目指す姿となったのは、「スポーツシューレ」と呼ばれるドイツの総合スポーツトレーニングセンターです。この施設はスタジアムや陸上競技場のほかに、多目的体育館などスポーツ愛好家にとって最高の環境が整えられており、地域の人々が交流を深める場としての一役も担っています。さらに、アカデミーを非営利法人で運営するマンチェスター・ユナイテッドなど海外クラブの運営方法も参考にしながら、C大阪は、今の育成組織を構築しました。

一般社団法人のメリット

法人化の利点は、大きく分けて2つあります。1つは、トップチーム(=C大阪)の成績に左右されることなく育成組織を強化できることです。非営利法人は、収益目的の事業から得る利益は課税となる半面、選手育成など公益に寄与する事業の場合は非課税となります。つまり、目の結果にどうわれることなく、中長期プランで物事を考えることができます。

2つ目のメリットは、非営利法人がスポーツ振興くじ(toto)などの助成金を受けられること。2013年には、大阪市此花区の舞洲グラウンドやクラブハウス、夜間照明設備を整備する際の総工費約5億円のうち、約1億4000万円がtotoより助成金として交付されました。

良い環境には将来有望な選手が集まり、チーム全体のレベルアップにつながります。また、充実した環境のもと、選手たちの活動の場が増え、それにより自然と地域の人々との交流が生まれ、親しみを持ってもらうにつながり、C大阪というクラブの知名度の向上にも結び付いていきます。

個人参加型の育成支援

C大阪は2007年、「多くの人たちの力で、セレッソ大阪の未来に美しい花をたくさん咲かせたい」という思いを込めて、育成組織のサポートを目的とする個人協賛会「ハナサカクラブ」を設立しました。不特定多数の個人(および法人)から一口3000円の寄付を募集(複数口の寄付が可能)。ここで集まった協賛金は、クラブ運営費とは完全に分け、選手育成のためだけに活用されています。発足初年度は約150万円だった協賛金は、2012年は約1300万円、2013年には約1600万円と10倍以上にまで増加しており、セレッソ大阪アカデミーの活動を支えています。



2007年、C大阪は選手を育て、輩出し続ける仕組みづくりに着手した



助成金を整備資金の一部に充てて、完成した舞洲グラウンド

サポーターに「一緒に未来の選手を育ててみませんか」と呼びかけたことから始まったハナサカクラブは通常のファンクラブと異なり、会員に還元される特典はありません。その代わり、クラブは会費をどのように使ったかを公式ホームページなどを通じて公に報告しています。C大阪堺の場合、昨年度の協賛金はマイクロバスの運行、チームが主催するサッカー大会の運営費、高知でのキャンプ費などに充てられました。地道な働き掛けが、絶大な支援につながった典型的な例と言えます。C大阪堺は、たくさんの人々の期待を受けながら活動を続けています。

各地で芽吹く新生クラブ



総合型地域密着スポーツクラブのシンボルに AC長野パルセイロ・レディース



運営会社

株式会社長野パルセイロ・アスレチッククラブ

所在地

長野県長野市屋島3300

クラブ理念

- ・地域社会と連携し、「地域密着協働型スポーツクラブ」を目指す
- ・スポーツの普及・振興に貢献し、スポーツ文化の創造に寄与する
- ・一貫性ある指導により、心身の健全な発達と個性ある選手を育てる

クラブ沿革

- 1990年 「長野エルザサッカークラブ」を創設(男子)
- 2000年 「大原学園JaSRA女子サッカークラブ」設立
- 2003年 日本女子サッカーリーグ加盟
- 2007年 「AC長野パルセイロ」に改称(男子)
- 2010年 2009シーズン終了後、大原学園JaSRAより移管し、「AC長野パルセイロ・レディース」に名称を変更

アカデミー(育成組織)

AC長野パルセイロ・シュヴェスター(中高生)

地域社会に愛されるクラブに

AC長野パルセイロ・レディース(以下、パルセイロ・レディース)の前身は、学校法人大原学園の系列の一つ、大原スポーツ公務員専門学校のチームとして2000年に設立されました。大原学園JaSRA女子サッカークラブは、サッカー専攻科女子サッカーコースの生徒や教員を中心とする女子チームとして、2003年から2009年まで日本女子サッカーリーグで奮闘していました。

その後2009年に、当時、北信越フットボールリーグ1部に所属していたAC長野パルセイロにチームを移管する話が持ち上がり、翌年、パルセイロ・レディースが発足しました。

パルセイロ・レディースの運営会社である株式会社長野パルセイロ・アスレチッククラブは、男女サッカーチームに加えて、アイスホッケーチームも運営しています。今後のスポーツチーム運営の拡大も視野に入れつつ、目指す姿は地域社会と手を取り合って活動する総合型地域密着スポーツクラブ。クラブ名の「パルセイロ」はポルトガル語の「パートナー」に由来しており、ホームタウンの長野市を中心とした東北信越の住民・企業の良き仲間でありたいという思いが込められています。

総合型地域密着クラブの意義

長野パルセイロ・アスレチッククラブが目指す総合型地域密着スポーツクラブは、地域コミュニティーの譲成に寄与しています。理想は、地域の住民がいろいろなスポーツに、子どもからお年寄りまで、それぞれの目的に合わせて携わることのできる環境を整えること。このような環境があれば、スポーツを通じて世代を超えた交流が深まり、地域社会が活性化さ



2009シーズン終了後に発足したパルセイロ・レディース。地域との「共生」を目指している

れるなど、多くのメリットがもたらされます(表1)。

パルセイロ・レディースは、長野パルセイロ・アスレチッククラブ同様、「スポーツを軸とした街づくり」を推進する象徴として、自治体からサッカー専用スタジアム(建設中)や練習グラウンドを用意されるなど、環境面での後押しを受けています。また、選手たちがサッカーに集中できるよ

う、支援企業から就労面での協力も得ています。勤務先での就労時間は9時から15時で、コンディションづくりのため、選手たちが夕方から練習に打ち込む配慮がなされている点は大きなプラスです。

「選手たちの活躍は、地域の子どもに夢をもたらす」と考える自治体の期待も大きく、2009年に開始した「ホームタウンながの推進事業」をはじめ、よりいっそう長野パルセイロ・アスレチッククラブの周辺の整備に力を入れる構えです。2014年にはJR北長野駅とスタジアムを結ぶシャトルバスの運行費を補助するなど、クラブと地域と一緒に歩む土台づくりは、着々と進んでいます。

一貫性ある指導で育成

長野パルセイロ・アスレチッククラブは、「一貫した指導によって、心身の健全な発達と個性のあるクリエイティブな選手を育てること」を育成理念の一つに掲げています。特に力を入れているのが育成で、競技人口の裾野を広げることと同時に、下部組織から将来の日本代表選手、トップチームでプレーする選手を輩出することを目標に掲げ、育成や普及活動を行っています。2014年には13歳から18歳までの女子中高生を対象とするパルセイロ・レディースの育成組織、「AC長野パルセイロ・シュヴェスター」(シュヴェスターはドイツ語で「姉妹」)を設立。同年2月に実施したセレクションで選ばれた選手と、もともとパルセイロ・レディースでプレーしていた中高校生年代の選手を軸に、4月に長野県女子サッカーリーグで初の公式戦を迎えました。

パルセイロ・レディースの本田美登里監督は、シュヴェスターのアドバイザーを兼任。岡山湯郷Belleの監督時代、宮間あや選手(現日本女子代表)をはじめ、なでしこジャパンの選手を育て上げた本田監督の下、強化を進めています。



2013年から指揮を執る本田監督。
下部組織のアドバイザーも兼任する

新スタジアム完成を起爆剤に

長野パルセイロ・アスレチッククラブは、サッカーに関わる人の数を増やし、サッカーの社会的な認知度を高めることで大衆化を図ろうと考えています。サッカーというスポーツを大衆化する働きかけの一環が、新スタジアムの建設です。クラブは、2011年に1万5000人を収容できる新スタジアムの建設を自治体に依頼。同時にサポーターと支援団体の「アスレながの」が中心となって新スタジアムの確保に向けた署名活動を行い、8万人以上の署名が集まりました。このような地域社会の活動が実り、自治体は2012年8月にホームスタジアム南長野運動公園球技場を改修すると発表。自治体と支援企業が中心となって、改修費およそ80億円を投じることが決定し、2014年1月に工事が始まりました。

表1【総合型地域スポーツクラブのメリット】

- ・スポーツがより身近なものになる
- ・青少年の健全な育成に貢献できる
- ・地域が活性化される
- ・親子や家族、世代間交流を促す
- ・健康な体になれば、医療費が減る
- ・高齢者の生きがいとなる

表2【長野パルセイロが考える“クラブのあり方”】

クラブは地域みんなのもの(財産)

「サッカーをする」

- ・巡回指導やスクールでサッカーをする
- ・ジュニアユース&ユースでサッカーをする
- ・トップチーム&レディースチームでサッカーをする

「サッカーを観る」

- ・公式戦で応援する
- ・練習や紅白戦を観戦する

「サッカーを支える」

- ・株主&スポンサーになる
- ・選手を雇用する
- ・サポータークラブ会員になる
- ・ボランティアに参加する

クラブは、スタジアムが完成する2015年までに男子トップチーム(現在はJ3所属)がJ2に、パルセイロ・レディース(現在はチャレンジリーグ所属)がなでしこリーグに昇格する大きな目標を掲げています。



ホームスタジアムの完成予想図。1万5000人を収容することができる

各地で芽吹く新生クラブ



「Jクラブと地域クラブの提携により発足したクラブ」

横浜FCシーガルズ

Jクラブと地域クラブの趣意が合致

横浜FC（J2）を運営する株式会社横浜フリースポーツクラブは2012年6月1日、「一般社団法人横浜FCスポーツクラブ」を設立し、同年7月5日、横須賀市を中心に行なう男女サッカーチームを展開する「特定非営利活動法人横須賀シーガルズ・スポーツクラブ」と業務提携しました。これは、「地域密着と総合型地域スポーツクラブ」という理念を掲げ、地域のスポーツ活動の普及・育成を目指す横浜FCと、「女性が生涯スポーツとしてサッカーを続けられる環境をつくり、女子サッカーポートを広げたい」と考える横須賀シーガルズの趣意が一致して、実現したものでした。

この提携により、横須賀シーガルズ・スポーツクラブが運営していた女子のトップチーム「横須賀シーガルズFC」（※）は2013シーズンから「横浜FCシーガルズ」に改称し、活動拠点を横浜に移転。現在は横浜FCスポーツクラブが管理・運営を行い、なでしこリーグ参入を目指して活動しています。一方、育成組織やエンジョイチームの運営は、横須賀シーガルズ・スポーツクラブが担っています。

このように、育成型チームとして小学生からトップまでの一貫指導体制が構築されたことは、さまざまな成果を生み出しました。まず、地元でなでしこリーグ入りを目指す環境ができたことから、育成組織への加入希望者が増えました。それと同時に、一時は県外に流出していたシーガルズOGたちがチームに復帰する流れも出ています。また、トップチームの活躍によって県内の女子サッカーへの注目度が高まり、社会人選手を受け入れる企業が増加。クラブとしても、選手の将来的な生活設計を見据え、社会保障が充実した企業を紹介することができるようになりました。現在は12社で正社員16人、1社で契約社員2人が働いており、試合には女子サッカーのファンになった各企業の社員が観戦・応援に訪れています。

2013年5月には、totoの助成金を活用し、人工芝やナイター照明を有する総合型地域スポーツクラブの活動拠点「横浜FC東戸塚フットボールパーク」がオープンし、練習環境も大幅に改善されました。

なお、横浜FCシーガルズは、横浜FCスポーツクラブの経営状況によってチーム経営が左右されないような運営を目指しており、活動経費は全てユニフォームスポンサー料で賄われています。現在、ユニフォームおよびトレーニングウェアのスポンサーは10社を数えます。神奈川県サッカー協会とも良好な関係を築いており、2013年は国民体育大会予選に7人の所属選手を派遣しました。

※トップチームをはじめ、U-12、U-15、サテライトチームを編成。OGには大野忍、近賀ゆかり、矢野香子、大滝麻未らがいる。なでしこリーグやチャレンジリーグ、大学、高校でも多くの出身選手が活躍している。

運営団体

一般社団法人横浜FCスポーツクラブ

所在地

神奈川県横浜市保土ヶ谷区川島町646-2

クラブ理念

- ・地域密着と総合型地域スポーツクラブとしてのスポーツ文化振興、社会貢献
- ・女性が生涯スポーツとしてサッカーが続けられる環境をつくる

クラブ沿革

- 1977年 「横須賀シーガルズFC」創部
2006年 運営法人「特定非営利活動法人横須賀シーガルズ・スポーツクラブ」設立
2013年 一般社団法人横浜FCスポーツクラブと提携。「横浜FCシーガルズ」に改称
※女子トップチームの管理・運営は横浜FCスポーツクラブが、下部組織は横須賀シーガルズ・スポーツクラブが担当

アカデミー（育成組織）

- ・横須賀シーガルズJOY（サテライト）
- ・横須賀シーガルズMEG、横須賀シーガルズJOH（中学生）
- ・横須賀シーガルズAMY（U-12年代）

育成組織が充実 トップチームのなでしこリーグ入りが目標

横浜FCシーガルズは、前述通りトップチームを横浜FCスポーツクラブが、育成部門を横須賀シーガルズが運営することで、一貫した指導体制を確立しています。また、サテライトにあたる「横須賀シーガルズJOY」をはじめ、年代やレベル別に5つの部門を設け、各年代の女性に幅広くプレーする機会を提供しています。

現在、横浜FCシーガルズには高校生から社会人が在籍し、横須賀シーガルズ出身者のほか、県内在住者、県内チーム出身選手で構成されています。元日本女子代表でアメリカやイタリアのリーグでも活躍した山本絵美選手も、選手兼コーチとして所属。そのほか、チームのOG選手を指導者として育成する取り組みも進めており、現在、トップチームの2人の選手が育成チームでコーチを務めています。今後もトップチームを含め、全カテゴリーのコーチにOG選手を登用し、組織の充実化を図っていく考えです。



○発行 一般社団法人日本女子サッカーリーグ
〒113-8311 東京都文京区本郷3-10-15 JFAハウス7F
TEL:03-3830-1841 FAX:03-3830-1847
<http://www.nadeshikoleague.jp/>
○発行日 2014年7月18日 第1刷発行
○制作・編集 エルグランツ株式会社
○印刷 株式会社大熊整美堂
○制作協力 Jリーグフォト株式会社



<http://www.nadeshikoleague.jp/>